日当に眠る日常

Keiたま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日当に眠る日常

【Ｎコード】
Ｎ４７０８Ｌ

【作者名】
Ｋｅｉたま

【あらすじ】
異世界から現れた５人の男女と、迎え入れた世界の一人の女子高生が織り成す物語。
出逢って始めにしたのはリアル鬼ごっこ！？
まぁ成るようにしか成らないさ。
そんなストーリー。

黄昏時（前書き）

全くもって初心者丸出しが始めたので、どう転ぶか作者も知りません。拙い文章ですが、できの悪い頭捻って頑張ります。
お叱り、アドバイス、誹謗、中傷、なんでもござれ。よろしくお願い致します。

黄昏時

くるしぃ～もぅ、やだ走りたくない…

「…ハッ　ハッ…どこまで…走れ、ば…いいんだ…！！！」

只今絶賛リアル鬼ごっこ中。あたしを先頭に…てわけでもないけど不本意ながら水先案内人になっているから必然的に先頭にならざるおえず。ま、それは置いといて。

あたしと一緒に走ってるメンバーは実に個性的で。休日の秋葉原ならそれなりに馴染んだかもしれないが、という格好の男女5名。一言で済ますなら『ファンタジー』

ま、そもそも秋葉原行ったことないから何とも言えないが…うん、想像はつくでしょ？

5人とも体力はあるみたいでほぼ団子状態。すいません、現代っ子で。既に足がヤバいです。

そもそも何であたしが、ファンタジーな5人とリアル鬼ごっこで追いかけられてるのか、ここいらで回想してみよう！

いつも通りな日常。起きて、学校行って、カックン　カックンしながら授業うけて、今日はたまたま購買のパンの昼食で、お遊び程度な部活はサボって帰宅、中であった。

あたしはその日の気分で幾つかある通学路をランダムに下校するので、いつも同じ道を通らないのが日常だ。まぁ何処かしらで繋がるんだが、毎日違う方が面白いでしょ？因に朝は同じ道。心理的なのかはたまた実際距離の違いかなのかは分からないが、遅刻寸前な時、下手に近いと思って通る道程時間を食うったらありゃしない。だから朝だけは行き慣れた道。おっと話がズレた。

で、まぁいつも通りに昨日とは違う道で帰宅中に彼らに会った。

地元でも用がなければ知らないような小路を通っている時。ただでさえ狭いのに、頭を寄せ会うように佇み、通りの半分を占拠した集

団がいた。
円陣を形どっていた為、あたし側から3人の人が見えた。1人の女性を2人の男性が挟んだ形。
男性の一人は赤く髪を染め上げていて、先入観からか、（…ヤンチャな方？）と頭を過る。もう一人は茶髪、女性はハニーブラウン（明るめ）らしき色でウェーブが掛かっていた。
（…邪魔だなぁ…こんな狭いとこに固まってんなよ…常識位もとーよー）等と直接口には出来ないことを内心で愚痴りながら横を通り抜けようとする。

回想録

見られてる…？見られてるよね！？…この視線の先をたどったら負けだ！！心を無に！！私は風になる！！

集団に近付くにつれ、何となくだかアタシの勘が働く。関わるな、と。

いや、誰でもそう思うんですけどね。だって格好がファンタジー。えっ剣の小道具まで装備？　なんて関わらないと思うんですけどね。

但し、問題が。声をかけられた場合どうやって切り抜けるべきか…。道や捜しものなら良いよ？わかる範囲でお答えしましょうとも！だが、しかし！　『お姉ちゃんオレ等金欠でさー』とか『神は今貴女に願っています』とか言われたらどうするのさ！！5対1なんて火を見るより明らか！ちっくしょう、何で引き返さなかったアタシ！不精にも程がある！五体、次いでに精神も満足な状態でハウスしたいんだ！煎餅片手に寝転びながら印籠出てくる瞬間（再）を観たいんだ！！

――なんて現実逃避しながら無事横をつうかした。ただ、

「あのっ！！」

背中は無事ではなかったが。

アタシ以外歩いている人を見掛けなかった。でも淡い期待を胸に、

後方の人に声を掛けたのだろう。そうだよ、きっと。うん。

とそのまま歩き去ろうとすると―ポンポン―肩を叩かれたのでした。せめて命だけはお助けを。

「ハイ、なんでしょうか？」振り向けば、水の髪を綺麗に結い上げた美少女がおりました。　先程見た3人の中で見なかった色に　チラッと、集団に目線だけやるともう一人、先程見掛けなかった男性が居た。先の2人の男性より低めの身長ではあるが、2人が高すぎるのか男性が低いすぎるのかは分かりかねる。

「あの、いきなり呼び止めてすみません。ちょっとお聞きしたいのですが…あたし達気づいたらここにいて…」
「いいえ、お気になさらず。この辺り初めてですか？仕方ないですよ、地元人でも迷いますから。気付かずにここまでたどり着いちゃうのも無理無いですよ」
“にっこにっこ”例えるならばそんな笑顔。愛想笑いが得意な日本人ですから。道を尋ねるなら危険はナシ、早々に用件を片付けちゃいましょ。
「何処へ向かわれてたんですか？とりあえず、この道をまっすぐ、少し長いですが、ひたすら真っ直ぐ行って突き当たりを左へ曲がれば大通りに出ますから」
「あ…いえ、そうではなく、ここは何処ですか？」
「ここですか？＊＊＊町の＊＊＊の辺りですよ？」
「い…いえ…！！」
あれ、おかしいーなぁ。会話は成り立ってるよね？でも彼女の求める答えとは違うようだ。うむ、ここは。
「あー、こっちの道を真っ直ぐ行って二つ目の角を左に行けば右手に交番があるんで、そちらで色々訊かれると良いですよ。そこのお巡りさん親切でこの近辺じゃ頼りにされてるから、きっと何かしらしてくれますよ」
ごめん田中のおっちゃん。丸投げしたけど頼りにしてるよ、田中のおっちゃん。何せアタシが小学生の頃、何を思ったかとあるビルの屋上にある不思議物体を追いかけた末に宙ぶらりんになったところを助けてくれたヒーローだもんね！あとで話を聞かせてね田中のおっちゃん。
集団の方へと去っていく（きちんとお礼を言ってから）背中を中途半端に見送って家路へとむかった。まってて！黄門様！できれば銀ちゃんもアタシが帰ってくるまで脱がないで！！

逃走中

無事、人助けも済んであと少し、もう少しだけ歩けば愛しの我が家（テレビ）にたどり着ける！
と、気を許していたのは認めよう。
あぁそうさ、テーマソングを歌って変な目で小学生に見られたさ！
それぐらい緊張から逃れてたさ。
…それの何が悪いか！？否、わるくない！認めんぞ！！交番まで教えたのに…背後に見慣れぬ浮遊物体を引き連れてこちらに迫り来る集団に見覚えがあるなんて！！水色の髪の女性と目があったなんて！その目が懇願するよ「助けて！！」…叫ばれたなんて…！！

しかしいくら現実を拒否したところで迫り来る集団と浮遊物体。生き延びるための本能故か。
――　一緒に逃げ始めたあたしなのでした。ごめんなさい、“回想”だなんてここまで引っ張って！はい、成り行きで逃げてただけなんです、一言で言えば。
と誰にともいわず心のなかで謝罪するあたし。

「ねぇ！なんなのあの物体X！！なんで飛んでんの！！なんでおいかけてくんの！！」
理不尽な追いかけっこに猫は早々に脱いで問い掛ける。
「なんでって…とりあえず飛んでんのは魔法使ってるからじゃね？」
「却下！求めてる答えじゃない！そもそも魔法って！　冗談はいらんわ！！」
く…空気がっ酸素がっ！！無理してツッコむんじゃなかった！！この赤髪ヤンキーめっ。と内心では更に悪態ついてるあたし。
「ジャスの答えはともかく、どっか良い逃げ場所、隠れ場所知らな

い？お嬢さん。」
「あんたココの人間だろ？さっさと案内してよ」
と、立て続けに茶髪の人とジャニ系の可愛い顔した人が言う。…この人男だよね？女の子みたいだなぁ。でもこの物言いからしてコイツはSだな、敵だな。　と分析したところでなにもならないので、言われた通りにどこか安全そうな所はないかと、このへんのちずを脳内に広げてみる。うーむ…あ、でもさ、とふと先日見たSFドラマを思い出す。
「ねぇ！でもアレ体温とか…サーモグラ、ふぃ？だっけか。とかは大丈夫なわけ！？隠れててもバレる心配は！？」
「「体温？」」
女の子2人がハモって首を傾げる。

追っかけてくる浮遊物体X。見た目はバスケットボール。但し色は真っ黒だが。でもなんとな～く、目？何て思わせる2つの小さな穴。そして口の位置からは…
「おわっ！！また打ってきやがった！！」
茶髪のチャラそうなお兄さんが言う。そう口と思わしき所からは、銃の先の様な出っ張りが3段階になっていて、所謂レーザーってヤツを発射するんです。只今ごみ置き場が燃えました。カスになりました。
「ぎゃーっ！！ナニコレ！！何なのよ！！」
「何って…攻撃？」
黙れ赤髪。お前天然か！
「兎に角隠れ場所！！どっかないの？…そうだなぁ結界のある所だと一番良いけど」
結界？何訳解らない事を…。でも結界ねぇ、と思い付く場所がある。あたしにとっても家に帰れるチャンス！！

閑話・1（前書き）

大した話ではないですが…

閑話・1

走る　走る　走る！！！！
何故にって、命の危機が怪しいから！

あたしが先導しながら走り続けて１０分。『結界』と呼ばれ思い付く場所を目指し始めての時間。
…キツいっす。
あたし、長距離キライだから。

それでも漸く見え始めた希望の光。

「が、頑張って…！あの階段、キッツイけど、っ…登り、きったら…結界？内だから…！！いちお」

最後はボソッ、と保険を効かして5人に聞こえるように言う。

《カッコーン》

鹿威しの音がなり響く。

あの息苦しいマラソンがまるで嘘の様に、今のあたしは寛ぐ。あぁ、生きてるって素晴らしい…！！

「…ちっ、銀ちゃん脱いだ後か…」

そう呟くと《バキッ》と叩かれるのはいつものこと。

閑話・1（後書き）

長らく更新せずいるのに、毎月覗いて頂けているようで幸せ者です！！ありがとうございます！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4708l/

日当に眠る日常

2011年12月18日07時46分発行